

「現在地はコムソモリスク。一時間後アレキサンドルに着く。直ちに連結船でアムール河を渡河する。ここは北緯五十度、ポルトワニノ（間宮海峡のワニノ港）まで二百七十キロである……」

全員不安も失望も消しとんで、港から乗船して故国に帰る！！と大喜びであった。

列車は船に積まれて渡河、また走り続け、停車のたびに沿線の労務者（囚人）に物を盗まれたり、すでに入ソして伐採に従事している日本兵に遭ったりする。聞けば千島の部隊の由。

十月二十五日、駅もない山中で停車、全員下車。二百メートル離れた木立ちの中に収容所があった。ここが私が二十二年六月復員するまでいたムーリ地区の第一分所であった。やがて厳寒の中、伐採作業が始まるのである。

シベリア抑留体験記

静岡県 長谷川 喜一

昭和二十年八月九日午前零時、不寝番明け番交替直後爆音と同時に爆弾投下と機銃掃射の音に、アメリカのB二九かと思った。夜が明けて、部隊長が、ソ連軍が侵入してきて日ソ開戦となったとのことで、直ちに重病傷患者は汽車で後方に送り、独歩患者は原隊に帰し、病院を閉鎖し、十日午前零時、後退し牡丹江に到着、以来終戦まで、野戦病院を開設して傷兵の治療に当たる。多くの傷兵が入院し、その治療に当たる病院長の目から涙が滝のごとく流れていた。入隊以来、初めて戦争の悲惨を知った。

十五日、終戦となり、武装解除をされ、牡丹江に各部隊が集結、再度傷兵の治療に当たる。ソ連の貨物列車にて十一月三日、ちょうど明治節に満州綏芬河を経由、シベリアに入り、ハバロフスク第六分所に収容された。周

囲には有刺鉄線が張られ、四隅には銃を持ったソ連の兵士が立っていた。収容所は大きな倉庫を改造したもので、五百人を収容するので、内部は上中下と三段になっていた。三か月も入浴がないため、毎日シラミに攻められていたので、まずシラミ退治。

三日後より作業に入る。昼夜三交替なので、夜間の作業もあった。アムール河畔の製材工場で、直径一メートルもある大きな木材を長鋸でひくので、製材が川のごとく流れてくる。その製材を処理するのである。また、鉄道の枕木を一本ずつ肩に担いで、貨車に積み込む作業、一本の重量は五十キロもある。食糧はなく、零下五十度の寒さの中での重労働なので、多くの友が倒れた。また真夜中、駅に貨車が入ると、石炭・セメントの貨車下ろしに出役させられる。

半年後、ソ連の政治部員が入り、民主運動が始まった。早期帰国するためには、この運動に参加するよう呼びかけられた。私はこの部隊に一人編入されたので、部隊名は知らされなかった。一年後に収容所ソ連側に下士官以上の写真が来た。三四一特務機関部隊とのことで、

満州において白系露人を雇っていたため、彼らが二重スパイをしたのではないかと思う。帰国の障害になってはならないと、これをきっかけに民主運動に全員が参加、運動を盛り上げた。

夏が来た。タンポポ、アカザをはじめ雑草が生い茂り、作業所、また帰所後、周辺の雑草を取り、全員が毎日食べた。その中に毒草があったのか、二人が死亡した。

二十二年七月、ハバロフスク第十一分所に移された。この分所は小さい収容所で百人くらい。作業は魚工場であった。作業が終わり、帰りには、魚を被服の中に入れて持ち帰ると、工場の出口に門衛がいて、一人一人検査をして取り上げる。私は十日後に医務室勤務を命ぜられたが、魚工場の軽作業なので患者はなかった。

二十三年一月、ハバロフスク第十四分所に移転。当分所は第二ハバロフスク駅の近くで、道路を隔て飛行場があり、その片隅に山田関東軍司令官の乗って来た戦闘機があった。当分所は建築作業で、岩のごとく氷結した土をツルハシで二メートルの深さに掘り、基礎を作り、そ

の上にれんがを積み、二階、三階までもコンクリを持ち上げる。このような作業なのでノルマはなかった。しばらくして民主委員長を選出して、作業より帰所後、社会主義の要旨について教授を行った。

七月に入り、二十人がアムール河の中州に、家畜の飼料にする草刈りに。私も救護員として同行。三カ所の水たまりがあり、その中に大きな鯉や鮒がいたので、大釜で煮て食べた。十日間で終わり帰所。民主運動を盛り上げたためか、七月末、五百人のうち四百五十人が帰国した。五十人は残された。私もその一人。馬車の係が帰国したので、私がその役を引き受けた。毎日、糧秣受領と収容所長職員の家庭に水、石炭、薪等の運搬が仕事。家族の人が、私が伺おうとお茶を出し、パンを与えてくれる。

二十四年八月十五日、帰国のため収容所を出発。八月三十日、山澄丸にてナホトカを出発。九月一日、舞鶴に上陸。九月三日、七年ぶりに帰宅。

飢えと寒さと重労働

千葉県 溝口 菊雄

ウラルの山中で

八月十五日終戦の玉音放送に悲憤の涙を流し、十九日にソ連軍使の出迎えて用心深さと猜疑心の強さにてこずったあげく、特務機関本館に集合を命ぜられ、武装解除を受け、続いてハルビン刑務所に収容された。ここでは空腹と毎晩のように襲う南京虫の大軍に悩まされ、終戦直後のことでもあり、生命に対する不安さえ頭の片隅には残っていた。

一週間ほどして貨車に乗せられ、東へ向かった。ソ満国境の激戦の跡を通り、着いた所は極東司令部があるウオロシロフであった。ここではもっぱら取り調べを受けるのが仕事だった。

十二月の初め、再び貨車に乗せられ、汽車は西へ西へと走った。二十八日目に十数人の死者を出しながら一面